

独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究

藤原武弘・来嶋和美・神山貴弥・黒川正流

広島大学総合科学部情報行動科学教室

(1987年10月31日受理)

Survey on the Loneliness and Social Network of the Aged who Live Alone

Takehiro FUJIHARA, Kazumi KUIMA, Takaya KOHYAMA, and Masaru KUROKAWA

Abstract

The purposes of this research were to examine the degree of loneliness and the structure of social network in the aged. Subjects were 416 aged above 65 years old who lived alone. The results showed that the score of loneliness was unexpectedly lower and there was no sex difference. The loneliness was associated with the number of supporters and the amount of interaction in interpersonal relationship. The degree of loneliness was lower when subjects had many supporters and many contacts. It was found that positive social interaction function was most important for decreasing loneliness.

我国における人口の高齢化は急速に進行しており、21世紀初頭には本格的な高齢社会が到来する。具体的な数字を列挙すると、昭和60年では、65才以上の老年人口の占める割合は10.2%であったものが、昭和75(2000)年に15.6%、昭和120(2045)年には22.1%にもなる。このように65才以上の老人が増えるのに対して、15才から64才までの働く世代が減少する。そこで、昭和56(1981)年には、老人一人を、働く世代7.2人で支えていたものが、昭和75(2000)年には4.3人、昭和95(2020)年には2.8人で支えることが予測されている。また、国勢調査の結果によると、昭和40年以降60年までの20年間に、独り暮らしの老人の割合は、6.7パーセントから13.9パーセントへと2倍の増加である。

現在、日本の高齢者の抱える大きな問題として自殺率の高さがあげられる。厚生省が諸外国と日本の自殺率を比較した統計によると、65才以上では人口10万人に対して43.8人で、20カ国中7位で上位に位置している。特に女性は3位の高さにある。こうした原因としては、病気や家族内の人間関係、孤独、自殺を罪と考えない社会の風潮等が考えられる。

ところで個人の人生周期における変化に注目すると、壮年期から老年期に移ると役割や地位の変化が生じる。Rosnow(1973)はこうした加齢化の伴う役割の移行を次の5つの点から分析している。

1. 役割の喪失によって有意義な社会的な参加から老人は締め出され、価値が低められる。
2. 老年はすべてのコーホートにわたって、体系的な地位の喪失を経験する人生の一番最初の段階である。

3. 私達の社会の人々は加齢化の運命に慣れてはいない。
4. 社会は老人の役割を明確にしていないので、老人の生活は社会的には構造化されていない。
5. 役割の喪失によって社会的同一性を老人から奪ってしまう。

このように老年期に入ると、役割の移行に対する適応といった困難な側面に老人は遭遇する。また長田・原・荻原・井上 (1981) は老年期を社会的孤立に陥りやすい時期と捉えており、社会的孤立のネガティブな側面として孤独を心理学的に研究している。

加齢化とともに老人は孤立してゆくと一般には考えられるが、従来の研究は必ずしもこの考えを実証してはいない。

長田・原・荻原・井上 (1981) は、老人ホーム在園の老人を対象として孤独感を心理学的に研究した。孤独に対する自己認知と孤独感としての寂しさを調査した結果、女性の方が男性よりも孤立認知が無いという割合が高いことを見出している。また、友人と実子の有無が孤立認知と孤独感に及ぼす影響を検討し、友人の有るものは、孤立認知と孤独感が低いことを明らかにしている。

工藤・長田・下村 (1987) は、改訂版UCLA孤独感尺度を用いて老人大学の受講者を対象に調査し、孤独感、孤独に対する類型的な対処行動、感情反応を明らかにした。その結果、予想外に孤独感が低いこと、また対処行動や感情反応に性差が見られるなど興味深い事実を見出している。

総務庁長官官房老人対策室 (1987) の国際比較調査結果によると、さびしさを感じるものが「全くない」への比率が最も高いことを見出している。また孤独感に影響を与える要因として、婚姻上の地位と家族構成が指摘され、離婚者や死別者そして単独世帯の者に孤独感が高いことを明らかにしている。

従来我国で行われた、老人の孤独感や社会的ネットワークに関する研究は、総務庁 (1987) で行ったものを除けば、厳密な標本調査に基づくものではない。従って、得られた結果の一般性に関しても疑問があるように思われる。加えて、孤独感の測定方法にしても、工藤ら (1984) の研究を除けば、一つの調査項目で孤独感を測定しているので、尺度の信頼性といった面では問題がある。孤独感に影響する重要な要因として社会的ネットワークの有無が知られているが、友人の有無といった点に関してのみであり、社会的ネットワークの量的、質的な構造特性と孤独感との関係はほとんど明らかにされていない。そこで本研究では社会的に孤立していると考えられる独居老人の社会的ネットワークの構造特性を明らかにしながら、また孤独感との関係を標本調査により明らかにするのが目的である。

方 法

被調査者：昭和60年7月の広島市老人基本実態調査において、「ひとりぐらし」と回答した65歳以上の老人は8,770人であった。これを母集団としてこの中から昭和61年7月までに死亡・転居した者を除いた後、等間隔抽出法で600名をサンプリングした。

調査方法：あらかじめ調査票を郵送し、あとで面接法によって回収した。その結果、転居、死亡、入院、調査拒否などにより調査不能となったものが184名で、有効回答数は416件 (男性71名、女性345名)、回収率69.3%となった。本調査は昭和61年11月1日から12月15日までの期間に行なわれた。

調査内容：具体的調査内容は Table 1 に示されている。孤独感尺度は、工藤・西川 (1983)

Table 1. 調査内容

<p>(フェイスシート)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性 ・年齢 ・健康状態—持病の有無 <p>(孤独感尺度の測定項目)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 私は人とのつきあいが無い。 2. 私には頼りにできる人がだれもいない。 3. 私は今だれとも親しくしていない。 4. 私は仲間はずれにされていると感じる。 5. 私は大変引っ込み思案なのでじめじめを感じる。 6. 私には知人はいるが、気心の知れた人はいない。 <p>(社会的ネットワークの測定項目)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子供に関する測定項目 <ul style="list-style-type: none"> ・子供の有無 ・子供の人数 ・続柄・年齢・性別 ・子供との連絡回数 <ul style="list-style-type: none"> ア. 週に2回以上 イ. 週に1回 ウ. 月に1回 エ. 年に2, 3回 オ. 年に1回 ・子供の居住地 <ul style="list-style-type: none"> ア. 町内 イ. 市内 ウ. 県内 エ. 県外 オ. 海外 2. 頼りになる人に関する測定項目 <ul style="list-style-type: none"> ・頼りになる人の有無 ・頼りになる人の人数 ・年齢・性別 ・間柄 <ul style="list-style-type: none"> ア. 学校が同じ イ. 自分の親戚 ウ. 配偶者の親戚 エ. 会社と同じ オ. 異性の友人 カ. 近所の人 キ. その他 ・頼りになる側面 <ul style="list-style-type: none"> ア. 趣味・スポーツの相手になってくれる (社交的側面) イ. 物やお金を貸し借りできる (物質的側面) ウ. ぐちを聞いてもらえる (情動的側面) エ. 生活に役立つ情報を教えてくれる (情動的側面) ・頼りになる人との連絡回数 <ul style="list-style-type: none"> ア. 毎日 イ. 週2, 3回 ウ. 週に1回 エ. 月に1回 オ. 年2, 3回 カ. 年に1回 ・頼りになる人の居住地 <ul style="list-style-type: none"> ア. 町内 イ. 市内 ウ. 県内 エ. 県外 オ. 海外
--

の孤独感尺度から6項目を選定し、「決して感じない」「めったに感じない」「時々感じる」「しばしば感じる」の4段階で評定させた。社会的ネットワークに関する具体的項目は、子供・頼りになる人の有無、間柄、年齢、性別、人数、連絡回数、居住地、連絡手段からなっている。さらに頼りになる人の場合、頼りにする点（社会的側面、物質的側面、情動的側面、情動的側面）についても調べた。

結 果

1. 社会的ネットワーク

(1) 子供の有無・続柄・年齢・連絡回数・居住地

独居老人416名の中で、子供がいると答えた人は78.8% (328名)であった。子供の総数は795名で、その内長男が27.0% (215名)、長女が28.6% (227名)であった。子供の男女の割合は、男性50.1% (398名)、女性49.9% (397名)でほぼ半々であった。子供の年齢は40歳未満が19.2% (149名)、40歳から49歳が49.8% (388名)、50歳以上が31.1% (242名)であった。

子供との連絡回数の頻度を見たものがFig.1.である。月に1回が31.9% (254名)で最も多く、次に週に2回以上の26.0% (207名)で、第3番目が週に1回の20.9% (166名)であった。月に1回以上連絡をとるものは全体の約8割を占めていた。子供の居住地は、Fig.2.に示した通り町内が13.0% (103名)、市内が43.4% (345名)、県内が12.1% (96名)、県外が28.2% (224名)であり、県内までで全体の約7割を占めていた。

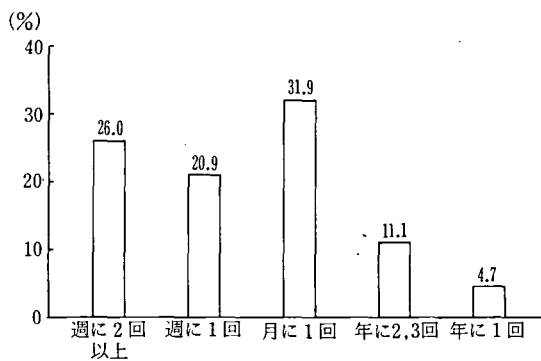


Fig. 1. 子供との連絡回数

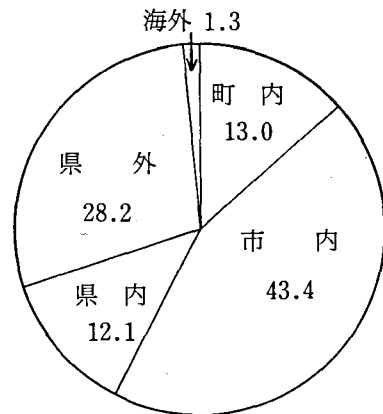


Fig. 2. 子供の居住地 (%)

(2) 頼りになる人の有無・間柄・年齢・連絡回数・居住地

独居老人416名の中で、頼りになる人がいると答えた人は85.1% (354名)であった。これを老人の性別にみると男性の場合、頼りになる人がいると答えた人は74.6% (53名)であり、女性の場合頼りになる人がいると答えた人は87.0% (300名)で若干女性の方が頼りになる人が多いことがわかった。頼りになる人の総数は945名で、その人との社会関係は自分との直接的親戚が最も多く58.5% (553名)であった。次に多かったのは近所の人19.6% (185名)であった。頼りになる人の男女の割合は、男性39.9% (377名)、女性60.1% (568名)であった。頼りになる人の年齢は40歳未満が9.4% (89名)、40歳代が22.9% (216名)、50歳代が21.8%

(206名), 60歳代が21.6% (204名), 70歳代が17.9% (169名)であった。頼りになる人の年齢と間柄の関係をみると, 自分との直接的親戚の場合は40歳代が29.6% (158名), 50歳代が25.7% (137名)であり, この二つをあわせて5割をこえた。また, 近所の人の場合は60歳代が33.7% (57名), 70歳代30.2% (51名)であり, 同年代の人が頼りになる人となっていた。

頼りになる人全体で連絡回数を見たものが Fig. 3. である。毎日が23.3% (220名), 週2, 3回が19.6% (185名), 週1回が22.8% (215名), 月1回が24.7% (233名)であった。この4つの項目で全体の約9割を占めていた。頼りになる人の居住地は, Fig. 4. に示した通り町内34.5% (326名), 市内41.8% (395名)でこの2つの項目で全体の約7割5分を占めていた。そのつぎに多かったのは県外の12.5% (118名)であった。

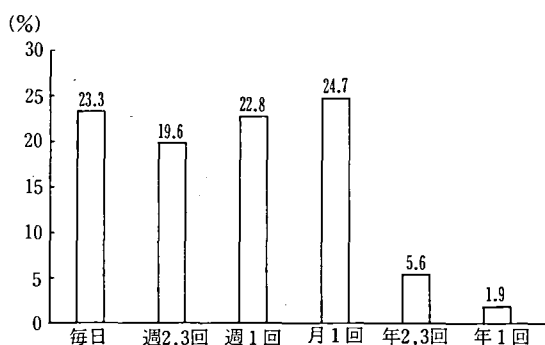


Fig. 3. 頼りになる人との連絡回数

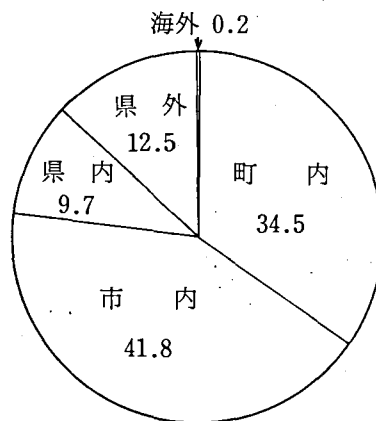


Fig. 4. 頼りになる人の居住地 (%)

2. 孤独感

まず孤独感を測定する尺度が一次元性をもつものかどうかをチェックするために, ガットマン尺度解析法を用いた。分割点を変化させて解析を試みたところ, 全ての項目で分割点が3点以上のとき再現性係数が最も高く0.93となり, 一次元性の高いことが確認された。従って以後, この6項目は総得点で結果を検討することにする。すなわちここでの孤独感得点は, 決して感じない, めったに感じないを0とし, 時々感じる, しばしば感じるを1として, その合計点よりなる。孤独感得点の分布は Table 2に示している。

Table 2. 孤独感得点の分布

孤独感得点	0	1	2	3	4	5	6
割合	65.2%	16.8%	7.1%	2.9%	4.2%	2.4%	1.6%
人数	249	64	27	11	16	9	6

(1) 孤独感と性, 年齢, 健康状態との関係

まず性, 年齢, 健康状態と孤独感得点の関係を検討するために, χ^2 検定を行なった。その際, 孤独感得点0を孤独感0群, 1以上を孤独感1以上群として, 二分割して処理した。年齢は,

ここでは65歳から74歳までを老齡前期, 75歳以上を老齡後期と区分けした。性や年齢と孤独感の間に有意な相関はなかった(性, $x^2=2.70$, $df=1$, $n.s.$; 年齢, $x^2=0.38$, $df=1$, $n.s.$)。健康状態と孤独感得点の関係について調べてみると, 孤独感0群で持病があると答えた人は61.9% (161名), 孤独感1以上群で持病があると答えた人は71.6% (99名)であり健康状態が悪い方が多少孤独感が高いが, 有意な相関はなかった($x^2=3.26$, $df=1$, $n.s.$)。

(2) 孤独感と社会的ネットワークの関係

つぎに社会的ネットワークと孤独感得点の関係を検討するために, x^2 検定を行なった。その際, 子供の有無, 頼りになる人の有無との関係をみるときは, 先ほどと同様に孤独感得点を二分して処理した。また社会的援助, 連絡回数, 近接度(居住地)との関係をみるときは, 孤独感得点0を孤独感0群, 1を孤独感1群, 2以上を孤独感2以上群として, 三分割して処理した。

① 子供, 頼りになる人の有無・人数と孤独感得点の関係

子供の有無と孤独感得点の関係は Table 3 に示したように, 孤独感1以上群の割合は子供がいる人の場合31.4% (94名), いない人の場合47.0% (39名)であり, 子供がいる老人の方が孤独感1以上群の割合が有意に少なかった($x^2=6.92$, $df=1$, $p<.01$)。さらに詳細に子供の人数と孤独感の関係を検討したのが, Fig. 5. である。子供の人数が1, 2人の場合孤独感0群は69.6% (117名), 3人以上の場合孤独感0群は67.2% (88名)と, 子供の人数と孤独感の間には有意な相関はみられなかった。

頼りになる人と孤独感得点の関係は Table 4に示したように, 孤独感1以上群は頼りになる人がいる場合31.3% (102名), いない場合55.4% (31名)と, 頼りになる人がいる老人の方が孤独感1以上群の割合は有意に少なかった。($x^2=12.20$, $df=1$, $p<.001$)。さらに頼りになる人の人数と孤独感得点の関係を検討したのが, Fig. 6. である。Fig. 6. からも明らかなように, 孤独感0群の割合は頼りになる人がいない人の場合44.6% (25名), 頼りになる人の人数が1, 2人の場合61.0% (97名), 3人以上の場合76.0% (127名)と, 頼りになる人の人数が増えるにつれて, 孤独感0群の割合が増えていた($x^2=20.3$, $df=2$, $p<.001$)。また男女別に頼りになる人の人数をみると, 男性は平均2.48人標準偏差2.49, 女性は平均2.81人標準

Table 3. 子供の有無による孤独感

子供の有無	孤独感得点	
	0	1以上
無	53.0% (44)	47.0% (39)
有	68.6% (205)	31.4% (94)

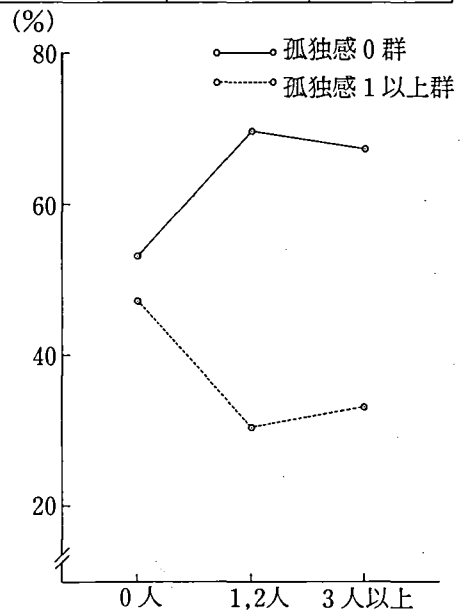


Fig. 5. 子供の人数別にみた孤独感

Table 4. 頼りになる人の有無による孤独感

頼りになる人の有無	孤独感得点	
	0	1以上
無	44.6% (25)	55.4% (31)
有	68.7% (224)	31.3% (102)

偏差2.48で、女性の方が有意に多かった ($t = 7.30, df = 395, p < .001$)。

② 社会的援助と孤独感得点の関係

頼りにする点として情動的側面をあげたのは29.9% (283名)、情動的側面は26.3% (249名)で、物質的側面 (14.2%)、社交的側面 (10.2%) よりも割合が多かった。

Fig. 7. は孤独感得点別による社会的援助の関係を調べたものである。社交的側面で頼りにする人の割合は、孤独感0群 (10.8%)の方が孤独感2以上群 (5.3%)より有意に多かった ($\chi^2 = 4.01, df = 1, p < .05$)。また物質的側面で頼りにする人の割合は、孤独感2以上群 (23.9%)の方が孤独感0群 (13.3%)より有意に多かった ($\chi^2 = 7.01, df = 1, p < .01$)。

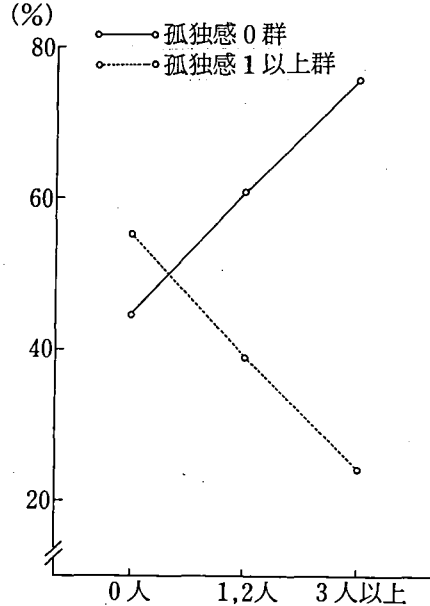


Fig. 6. 頼りになる人の人数別にみた孤独感

	社交的側面	物質的側面	情動的側面	情動的側面	回答なし
孤独感0群	10.8%	13.3%	27.0%	28.4%	20.5%
孤独感1群	12.4%	13.3%	25.8%	31.3%	17.2%
孤独感2以上群	5.3%	23.9%	24.8%	31.0%	15.0%

Fig. 7. 孤独感得点別による頼りにする点の割合

③ 子供・頼りになる人との連絡回数と孤独感得点の関係

子供との連絡回数と孤独感得点の関係を調べたものが Fig. 8. である。孤独感2以上群に注目してみると、その割合は連絡回数が月に1回以上の場合約15%、年に2、3回以下の場合約30%で前者の約2倍となっていた。しかし、週に2回以上、週に1回、月に1回の3つに関しては各孤独感群の割合に差はみられなかった。

次に頼りになる人との連絡回数と孤独感得点の関係を調べたものが Fig. 9. である。子供の場合と同様に孤独感2以上群に注目してみると、連絡回数が月に1回以上 (11.5%)の方が、年に2、3回以下 (25.4%)より有意に少なかった ($\chi^2 = 10.2, df = 1, p < .005$)。

④ 子供・頼りになる人の近接度と孤独感得点の関係

子供・頼りになる人の近接度と孤独感得点の関係を、子供・頼りになる人の居住地別による孤独感得点の差から検討した。その結果、近接度と孤独感得点の間に特に関係はみられなかった。

	孤独感 0 群	孤独感1群	孤独感2以上群
週に 2 回以上	72.1%	12.7%	15.2%
週に 1 回	69.3%	14.0%	16.7%
月に 1 回	69.7%	15.1%	15.1%
年に 2, 3 回	52.6%	14.1%	33.3%
年に 1 回	48.6%	21.6%	29.7%

Fig. 8. 子供との連絡回数別による孤独感得点の割合

	孤独感 0 群	孤独感1群	孤独感2以上群
毎 日	80.3%	12.2%	7.5%
週 2, 3 回	75.0%	15.3%	9.7%
週に 1 回	73.5%	10.2%	16.3%
月に 1 回	70.9%	16.4%	12.7%
年 2, 3 回以下	63.5%	11.1%	25.4%

Fig. 9. 頼りになる人との連絡回数別による孤独感得点の割合

考 察

最初に、老人の孤独感について考察を行う。孤独感の分布は結果で示したように、6つの孤独感尺度にすべて孤独感を感じないと反応した割合が65.2%を占めており、老人の孤独感あまり高くないように思われる。これと一致する結果は、総務庁長官官房老人対策室(1987)が行った国際比較調査結果でも明らかで、日本の老人で、さびしさを感じるものが「あまりない」と「全くない」のカテゴリーを選択した老人が71.3%を占めている。また工藤ら(1984)も予想外に高齢者の感じる孤独感が低いことを示している。諸外国と比較した場合、日本の65歳以上の老人の自殺率が高いという報告もあり、老人の孤独感が高いことが予想されたが、今回の調査ではその傾向はみられなかった。こうした原因として、調査対象者が独り暮らしの老人であり、しかも日常生活が不自由なくできる程度の健康状態であったためとも考えられる。従来の「老人は孤独」という先入観を我々は改めていく必要があるかもしれない。今後は、老年と青年のあるいは老年と壮年といった異なったサンプルでの孤独感の差の検討も必要と思われる。

性と年齢による孤独感の違いは今回の調査結果からは見出せなかった。それに対して社会的ネットワークの大きさに関しては性差が見られ、女性の方が社会的ネットワークが大きいことが明らかになった。こうした結果は従来の長田ら(1981)の研究結果とも一致している。つまり、長田ら(1981)は性差を比較した場合、男性の方が女性より自分が孤立していることを認めているものの、孤独感の無い群の割合が男女とも多く、性差は見られなかったと報告している。孤立しているという自己認知が社会的なネットワークを測定していると考えれば、孤独感に性差は無いが、社会的ネットワークには性差はあるものと考えられる。アメリカで行われた研究で、KahnとAntonucci(1983)は、女性のネットワークの方が男性よりも大きいことが確かめられており、本研究の結果とも一致する点は興味深い。こうした性差の原因としては、Argyle(1984)が指摘しているように、女性の方がソーシャル・スキルが高いことによるのかもしれない。また工藤(1984)は、男性は孤独によって寂しさを感じ、それを個人的に憂さ晴らすという形をとるのに対して、女性は孤独によって対人的失望感を抱き、人間関係の再構成によってその失望感を補うと指摘している。このように、孤独感への対処行動が性によって異なるために社会的ネットワークの大きさに性差が見られるのかも知れない。

次に社会的ネットワークと孤独感との関係について考察してみると、子供がいること、および頼りになる人がいることによって、孤独感が有意に低くなることが明らかになった。特に、頼りになる人の有無が子供の有無以上に孤独感に影響していることには注目したい。長田ら(1981)も、老人ホームの場合ではあるが、自分にとって意味のある他者すなわち友人との日常における交流が、頻繁に会うことのない実子よりも孤立認知や孤独感に強く影響している可能性がある」と指摘している。

また、子供や頼りになる人の人数と孤独感との関係については、既に結果でも触れたが、頼りになる人の人数が多くなればなるほど、孤独感を感じていない人の割合が増加する。こうした結果から考えられることは、頼りにできる人が増加するにつれて、孤独感が減少することを示している。それに対して、子供の人数と孤独感との関係を見ると、両者の間には有意な関係は見られなかった。子供の人数は孤独感を低減する働きは無いようである。従って、子供の人数以上に頼りになる人の人数が孤独感に対して大きな影響力を持つことが明らかになった。

孤独感と社会的援助との間には部分的に有意な相関が認められた。すなわち、社会的援助のうち社交的な援助に関して、孤独感の低い群は高い群と比較して、社交的な面で頼りにしている割合が高い。こうした結果から、社交的な面での社会的サポートは、多少孤独感を軽減させ

る働きがあるものと推測される。

最後に、子供、頼りになる人の連絡回数と孤独感との間には有意な関係が見られたが、近接度との間には関係が見られなかった。こうした結果は、頼りになる人と被調査者との物理的な距離よりは、むしろ子供および頼りになる人との連絡回数の方が、孤独感により影響を及ぼしていることを示唆している。子供および頼りになる人との連絡回数と孤独感との関係では、子供ならびに頼りになる人との連絡回数が多くなるにつれ、孤独感を感じてない群の割合は増大する。特に子供との連絡回数と孤独感の関係では、月に1回以上のあたりに孤独感の高低を弁別する境目が見られる点は興味深い。独居老人の孤独感を低減の方向に働く社会的相互作用のギリギリの限界の頻度が月に1回なのかもしれない。

本研究は、昭和61・62年度文部省科学研究費補助金（一般研究B 課題番号61450016 代表者 黒川正流）の助成によるものである。

引用文献

- Argyle, M. 1984 Some new developments in social skills training. *Bulletin of The British Psychological Society*, 37, 405-410.
- Kahn, R.L., & Antonucci, T.C. 1983 Social supports of the elderly : Family/friends/ professionals. Final report to the National Institute on Aging.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究（I）—孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—, 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 工藤 力・長田久雄・下村陽一 1984 高齢者の孤独に関する因子分析的研究 老年社会科学, 6, 167-185.
- Lowenthal, M.F., & Robinson, B. 1976 Social network and isolation. In R. H. Binstock, & E. Shanas (Eds.) *Handbook of Aging and the social sciences*. New York; Van Nostrand Reinhold.
- 長田久雄・原 慶子・荻原悦雄・井上勝也 1981 老人の孤独に関する心理学的研究 老年社会科学, 3, 111-124.
- Rosnow, I. 1973 The social context of aging self. *Gerontologist*, 2, 82-87.
- 総務庁長官官房老人対策室 1987 老人の生活と意識 中央法規出版